

# 繁殖雌牛の栄養度を改善しよう

## 1 繁殖雌牛のステージ毎の養分要求量

繁殖雌牛の養分要求量は、維持期（種が付いた状態）、妊娠末期、ほ乳期と増加します。維持期を100%とすると、ほ乳期のDM（乾物）、CP（粗タンパク質）、TDN（可消化養分総量）はそれぞれ146～201%になり、増飼いの必要性がわかります。また、体格が違う場合も、同じステージ毎に比較して、大きめ牛では標準牛の104～110%になり、飼料給与量は牛の状態を見て、それぞれに合わせて給与する必要があります（表1）。

表1 ステージ毎の養分要求量（つなぎ飼い・自然ほ乳の場合）

管理区分				1日当摂取量						
体格	ステージ	体重 (kg)	群管理	ほ乳量 (kg/日)	DM (kg)	対維持期 (%)	CP (kg)	対維持期 (%)	TDN (kg)	対維持期 (%)
標準	維持期	450	なし	—	6.0	100%	0.485	100%	3.0	100%
	妊娠末期	500	なし	—	7.7	128%	0.701	145%	4.1	137%
	ほ乳期	450	なし	6.0	9.0	150%	0.974	201%	5.2	173%
大きめ	維持期	500	なし	—	6.5	100%	0.521	100%	3.3	100%
	妊娠末期	550	なし	—	8.2	126%	0.736	141%	4.3	130%
	ほ乳期	500	なし	6.0	9.5	146%	1.011	194%	5.4	164%
ステージ別の養分要求量比較 (大きめ牛の対標準比: 大きめ/標準)				維持期	108%	—	107%	—	110%	—
				妊娠末期	106%	—	105%	—	105%	—
				ほ乳期	106%	—	104%	—	104%	—

繁殖雌牛が摂取した栄養分は、①維持 ②胎児 ③成長 ④産乳 ⑤体脂肪蓄積 ⑥繁殖サイクルの順に使われます。過剰な栄養は不要ですが、栄養不足で繁殖雌牛が痩せすぎると、繁殖サイクルに使える栄養分が不足し、種付きが悪くなります。痩せ過ぎると改善するのに時間がかかるので、日頃から痩せすぎないように注意しましょう。

## 2 分娩前後の栄養度を整えよう

分娩2ヵ月前の繁殖雌牛の栄養状態を確認し、分娩前後に痩せすぎ、太りすぎにならないようにしましょう。

- ① 分娩2ヵ月前頃までに栄養度4～5、つまり肋骨が2本程度うっすら見えるような栄養状態にする（図1）
- ② 増飼いを開始し、分娩後激やせしないようにする。
- ③ 自然ほ乳では、ほ乳期は更に増飼い量を増やす。人工ほ乳では、繁殖雌牛の回復も考慮して、増飼い量は減らしつつ継続する。
- ④ 種付けまでは、肋骨が見えない程度まで増飼いを継続する（太りすぎない程度）。種が付いた時点でまだ繁殖雌牛が痩せている場合は更に増飼いを継続し、繁殖雌牛が①の状態まで回復したら維持期の飼料量に戻す。



図1 分娩2ヵ月前の母牛

繁殖雌牛の回復を考えると、人工哺育でも分娩後すぐに増飼いを切らずに、増飼い量を減らしつつ継続した方がよいと思います。少なくとも、分娩後は消耗し痩せてしまうので、栄養状態が整うまでは増飼いを継続しましょう。増飼いは、種付けしたら終了と決めるのではなく、個体毎の栄養状態を確認して決めましょう。

## 3 繁殖雌牛の特徴に合わせた飼料給与を

繁殖雌牛によって、繁殖雌牛は太らないが子牛が大きく生まれる、子牛は小さいのに繁殖雌牛が分娩後太っている、ほ乳期に激やせする等、分娩前後の特徴があります。付けた種雄牛によっても変わりますが、それぞれの特徴を記録し、次に分娩する時にはどうすべきか考慮して、極端な栄養状態にならないように飼料を給与しましょう。